師匠とＡＶ

その性欲、この霊〇〇隆が引き受けた！

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18742309

R-18, モ腐サイコ100, 芹霊, もぶおじさん×霊幻, ♡喘ぎ, 本番無し, 道具プレイ, モ腐サイコ小説100users入り

師匠が出演してるＡＶを見つけてしまった芹沢の芹霊すったもんだです。本番はありませんが、もぶおじさんがＡＶ内で少し師匠に絡みます。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

その性欲、この霊◯◯隆が引き受けた！

きっかけは、ＦＡＮＺＡ……大手１８禁販売サイトの品揃えに、不満を覚えたことからだったと思う。
最近は、髪の明るいスレンダーな女性が気持ちよさそうにしてる作品が好きで、そう言うのを検索しても、いわゆる「遊んでる女性」モノばかり出てきて困っていた。
俺は特に髪の明るい女性がスーツで真面目に働いているのが、部下と恋愛して性的なことに及ぶ作品が好きだった。
自分の分かりやす過ぎる性癖はさておいて。
そういう作品は、昔のＡＶに多い、というのを知ったのは、夜学の友人にレンタルビデオ屋に連れて行かれてからだった。
──宝の山かと思った。
人気が無くてＦＡＮＺＡから消えてしまった、そもそもアップロードされなかったような作品が、山ほど残っている。
その中には髪の明るいスレンダーな女優の学生モノや、人妻モノまであった。それも数えきれないぐらい。旧作だから料金も安い。最近、１人暮らしを始めて気軽にＡＶを見れるようになったのも手伝って、週に１回はレンタルビデオ屋に行ってみるようになった。

その日も旧作のDVDを一本ずつ地道にチェックしていた時だった。
気がつくと棚の端に辿り着いていて、隣はゲイビデオの棚になっていた。
きびすを返そうとして、固まった。
ゲイビデオの「オススメ！」とピックアップされている作品のタイトルが。
『その性欲、この霊◯◯隆が引き受けた！』
で。
パッケージの手で目隠しをして恥ずかしそうに俯いてるグレースーツの男性の髪が、見慣れた蜂蜜色だったからだ。
「……は？」
思わず声が出た。

『レンタル数Ｎｏ．３！ヌケる道具モノ！！可愛いお兄さんの痴態にあなたも大満足！！』
ポップの文言に目が滑る。
何だって？嘘だろう？
頭が真っ白になる。
とりあえず貸し出しダミーを引き抜いて、俺はレジに向かった。

帰り道。

心臓がずっと跳ねている。
霊幻さん。霊幻さん、どうしてですか、なんでですか。
ぽろ、と涙が出てきた。大好きな人がＡＶに出ていた。それだけで世界の根幹が崩れる気がする。とにかく、中を確認しないと。それをしないと今日は寝れる気がしない。
色んな霊幻さんが頭の中でぐるぐると回る。
茂夫くんを守るために、銃なんかを手に無謀にも社長に刃向かっていった霊幻さん。弱いのに、あの最強に近い中学生を守るために命をかけたあの人。焦がれる。俺にもそんな人がいたなら、きっと俺の人生はもっと明るかった。そう羨ましく思っていた。ある日の除霊で、尖った瓦礫から霊幻さんが俺を庇った。当たりどころが悪そうだったから、腕で代わりにしたんだとあの人は言って、怪我をした霊幻さんに、俺はめちゃくちゃ自分の未熟さを責めた。けれど、実は同時に飛び上がるほどに嬉しかった。人を利用するのに頼るのが下手なあの人が、使い捨てにしてもいいような俺を、大事にしてくれているのが分かったから。
それでじゃないけど。
それだけじゃないけれど。
いつの間にか霊幻さんは、俺の柔らかいところに大事に仕舞い込まれていて。
……そうだ。霊幻さんが昔、何の仕事をしていたって関係ないじゃないか。
俺は俺が知っている霊幻さんを信じる。
そうだ、霊幻さんは悪いことをしてた訳じゃない。

大人の契約の元、エッチなビデオに出た……だけ……
ごくり、と。
喉が鳴る。
ショックを乗り越えてきたら、次は内容がめちゃくちゃ……楽しみになってきた。
ヤバい。
エッチな霊幻さん、見たい。

家に着いたら、コンビニ飯を温めながら、早速ＰＳ２にセットしたＤＶＤを再生する。
『××スタジオ』
レーベルのロゴが表示された後、ゲイビデオのＣＭが流れる。
バックからばっかりだし、アナルものとこうしてみると変わらないなぁ、と思って見ていたら、霊幻さんによく似た金髪の男優が喘いでいるビデオが出てきて、思わず一時停止した。
……新たな扉を開いてしまった……。
作品名をスマホにメモってから、再生を続ける。

『その性欲、この霊◯◯隆が引き受けた！』

少し間抜けなタイトル表示のあと。
事務所によく似た配置のスタジオに、居心地悪そうにビジネスチェアに座った霊幻さんがフェードインしてくる。
思わず一時停止した。
心拍数が跳ね上がる。
間違い無い。
本人だ。
ダメだ、ただの前座のインタビューでも、メシ食いながら見れない、コレは。
温め終わった弁当を急いでかっこんで、お茶で一息ついてから、テレビの向かいのベッドに腰掛ける。
震える手で再生ボタンを押した。
『知ってる人もいるかなぁ？お兄さん、名前は？』

ナレーションの声に霊幻さんの唇が震える。
『……霊幻、新隆』
また一時停止した。心臓に悪い。所長だ。所長の声だ。
呼吸を整えてから再生する。
『珍しい名前だって言われない？』
『……たまに』
『緊張してる？』
『……っ』
『そりゃそうか（笑）これからエッチなこといーっぱいされちゃうんだもんねぇ？』
『……！』
かあああ、と霊幻さんの白い頬に赤みが差していく。
ちょっと待って欲しい。
可愛い。
巻き戻してもう一回再生してしまう。
『初体験はいつ？誰と？』
『……まだ』
『またまたぁー（笑）……え、マジ？嘘でしょ……そんなにエロいのに？世の中の男女ってみんなインポなの？』
思わず霊幻さんが顔を伏せる。
『はい、顔上げてー』
どこか事務的な声が響く。
ぱっと上げた顔が、さっきよりも恥辱に歪んでいて。
カメラが舐めるように顔を映す。
『カメラ映えするねぇー、先生。色が白いからかな？エロいよ。まだインタビューなのに（笑）』
本当に。もうお腹いっぱいだ。
これだけでヌケそう……。
こんなに恥ずかしそうにしてる霊幻さん、初めて見たし。
『じゃあさ、初チューは？ファーストキッス』
さっと霊幻さんが足元を見る。
『……無い』
『はぁぁぁ！？』

『だから、したことないって！！』
『嘘でしょ……センセイ深窓の令嬢か何かなの……？それなのにＡＶ出ちゃうの……？』
『うるっさい！』
カメラが霊幻さんの口元をズームする。
薄い唇が、ピンク色に艶めいていて。
『唇も処女だって（笑）』
また生唾を飲み込んでしまった。
『オナニーは週に何回ぐらい？』
『……っ、３回、ぐらいかな……』
また一時停止。情報量にキャパオーバーしそう。週に３回。なんでもない顔をして出勤してる日でも、ヌいてから来てる時もあるんですか？くっ、エロい……。
再生する。
『性欲強めなんだ（笑）オカズはどんなの？』
『……普通に、ＡＶとか……』
『何系？』
『……っ、純愛モノ……』
『かわいーっ！（笑）いつかは自分も、とか思いながらシコシコするんだ？（笑）』
一時停止。
純愛モノ見ながら……抜いてる霊幻さん……
ヤバい。想像するだけで可愛い。
再生。
『センセイ、テレビと比べてギャップが凄いねぇ。ベッドだと可愛くなっちゃうタイプ？』
『……知らねぇよ』
『あ、経験ないんだっけ（笑）じゃあ、カメラの前で今、ハジメテを晒してるんだね』
はっ、と霊幻さんが青ざめた顔でこちら……カメラを見る。
『ああ、怖がらせちゃった？大丈夫だよ、契約通り、センセイの嫌なことはしないからね。ホントに弁護士かってくらい契約にはうるさかったもんね、先生（笑）これからオモチャでもうるさく喘いで

ね（笑）』
『……分かった。契約だからな』
『あ、でも演技はしなくていいからね。ワザとらしいのウケないから』
『どうしろってんだよ』
『ちゃあんとプロが気持ちいいお道具用意してあるから、心配しなくていいよ』
『……っ』
霊幻さんの顔が恐怖と期待に歪む。
俺はそこで一時停止して、
１回抜いてしまった。
限界だった。こんな霊幻さん、ズルすぎる。可愛いやらエロいやら、こちらの童貞ごころにギュンギュンきた。
ティッシュをゴミ箱に捨てて、再生する。
『センセイ、好きな人はいるの？』
ド　ク　ン。
一時停止する。心臓が今までとは違う意味でバクバクと早鐘を打つ。
霊幻さん。
好きな人、いるんですか……？
ぱっ、と。黒髪でおかっぱの、到底勝てそうにない彼の愛弟子が思い浮かぶ。思い浮かんでしまう。
考えたくない。今、霊幻さんの側にいるのは俺なのに。
茂夫くんの存在は、大きすぎて。俺は何もされていないのに、ズタボロに打ちのめされたような気分になる。
やめて欲しい。
霊幻さん、嘘でもいいから……。
祈りながら再生する。
『今はいねぇよ』
さらりと言う霊幻さんに、ほーっ、と声が出た。
良かった。本当に良かった。
そして、そわ、と胸の中が騒ぐ。霊幻さん、フリーなんだ……。もしかしたら、俺にも、チャンスが……？

『そっかー。好きな人のことを考えてもらいながら、まずオナニーしてもらおうと思ったんだけど……ま、いいか。霊幻センセ、ちんこ見せてくれる？』
『……分かった』
一緒に温泉に行った仲だ。性器だって見たことがない訳じゃない。
でも。
男の情欲のために、ベルトに手をかける霊幻さんは、扇情的で。
ベルトを外して、ズボンの金具を外して、ジッパーを下げる。
白い指がなめらかに動くのを、カメラがアップで映す。思わずテレビにかぶりつきになる。
『下着ずらして、取り出して』
指示通り霊幻さんは性器を取り出す。
えっ。
『綺麗なピンクだねぇ』
薄いモザイクごしでも分かる、色の淡さ。
こ、こんなんだっけ……？今までまじまじと見たことが無かったから気が付かなかった。
『さすが未使用なだけあるね（笑）じゃあいつも通りオナニーしてくれるかな？』
ゆる、と霊幻さんの手が動き出す。
手を筒状にして、快感を追うように裏筋を刺激するスーツ姿が、なんともいえないいやらしさで。
自分も同じように手を動かす。
『ぁっ、いっ……！』
ぴゅるぴゅると精液がほとばしる。少し背を丸めた霊幻さんが目を伏せて、はぁ、と息をつく。
興奮で紅潮した頬が色っぽい。
『早かったね〜、今日のためにオナ禁してきてくれたんだね』
『だってアンタらが……っ』
『はいはい（笑）裏話はこれくらいにして、次はコレ使ってみよっか』
スーツのスタッフがお盆にピンクローターをコンドームに入れたものを持ってくる。

『これ、どうしたら』
霊幻さんが戸惑った声を上げる。
『んー、まず乳首に当ててみよっか。シャツくつろげて。あ、脱がないでね』
霊幻さんは言われたとおりにスーツのボタンを外し、ネクタイを取って椅子の肘掛けにかける。
ぷち、ぷちと震えながら、カウパーや精液でヌメヌメと光る指がボタンをぎこちなく外していく。
白い胸板がシャツからチラチラして目眩がする。
見たことある、はずなのに。
こんな淫靡な霊幻さんは知らない。
『乳首見せて』
そろりそろりとシャツを開いて薄桃色の乳首をカメラにさらす。
『綺麗なピンクだねー。自分でいじったことはある？』
『……っ、あるわけ、ないだろ』
『じゃあ今日がちくニーデビューだね！ほら、振動はこっちで調節するから、ローターを乳首に当ててみて』
『……？』
霊幻さんは不思議そうにコンドームに入れられたピンクローターを胸に当ててみる。こういうオモチャに余り詳しくないみたいだ。初心だなぁ。ホントによくＡＶ出ようと思ったな……。
『ぇあっ！？』
突然振動をはじめたローターに驚きの声を上げる。
『なんだコレ！？振動強すぎないか！？』
『まだ弱だよ？ほら、自分で乳首いじめて』
『……っ』
霊幻さんは頑張って乳首にローターを押し付ける。
『なんか……変だ、ムズムズする……っ』
『気持ちいいツボが押されてるからねー。そういう時は『気持ちいい』って言おうね』
『……気持ち、いい、気がする』
『女の子のところ、気持ちいい、って言って？』
『……！』

霊幻さんが目を見開く。俺はどんどんテレビにかぶりつきになる。
『おんなのこのところ、きもちいい……』
唇を軽く噛む霊幻さんの目がうるうるしてきてる。
恥ずかしい、ってのが画面全体から伝わってくる。
『じゃあ、男の子のところも気持ちよくなろっか。ローターをチンポに当てて？』
『えっ』
『ほら、早く。先っちょに当てるんだよ』
おそるおそる霊幻さんはローターを性器に当てる。
『ぅあっ！無理、無理だって』
『いけるいける』
『ビリビリして無理！』
はーっ、とため息が画面の向こうから聞こえて来る。
『はい、男優さん入りまーす』
びくりと霊幻さんが怯える。俺も警戒する。とうとう男優とのカラミか。
男優は安そうなスーツを着て、透明なゴム手袋をしていた。
『はーい霊幻さん、我慢してねー』
男優は霊幻さんからローターを奪い取り、無慈悲に性器に押し付けた。
『あああいやだぁっやぁっあっあっああああっこわい……っ』
経験したことのない刺激に、霊幻さんはトロリとした涙をこぼしながら身をよじらせる。
壮絶な光景だった。
『いやぁっいくいくいく、いくぅ……っ』
ローターの振動で精液が撒き散らかされる。力なく開かれた足がたまにビクンと動くのがいやらしい。
『はぁっ……はぁ……』
霊幻さんの薄い胸が上下している。
そこで存在を主張する乳首が、妙にエロティックで。
そうか。
乳首、ローターで赤く腫れて、勃ってるからだ。
『じゃあ、そろそろアナル見せてもらおっか』

がたっ、と立ち上がってしまった。
それは流石に。
見たことない。
『……分かった』
椅子から立ち上がった霊幻さんがズボンを下着ごと脱ぎ捨てる。
『あ、シャツガーターとソックスガーターはそのままね。じゃ、ベッドに移動して、お尻が見えるようにずり落ちて座ってね？』
オフィスチェアの隣に設置されていたベッドに移動する。カメラも切り替わって、体育座りをした霊幻さんを正面から映す。
そろりそろりと霊幻さんは自分から足を開いて。
ぐい、と性器を持ち上げて、慎ましやかなアナルをカメラに晒した。
『指で開いて』
ぐいっと霊幻さんが無感情に広げたアナルは。
ちょっとめまいがするぐらい綺麗なピンク色で。
一時停止して抜いた。
ティッシュを捨てながら再生する。
『ローション絡めながら、小指挿れれる？』
『……たぶん、できる』
霊幻さんはローションのボトルを受け取ってぐちゅぐちゅと指に絡める。
つぷ、と霊幻さんが指を挿れた瞬間。
アナルにモザイクがかかって、ひどくガッカリした。モノ挿れちゃうとダメなんだなあ。
『どう？気持ちいい？』
『……変な感じ。ちょっと痛いかも』
『処女だもんね（笑）指増やせる？』
『……やってみる』
なんとなくカラクリが分かってきた。基本的には霊幻さんが自分でやって、無理なら男優が手を出す、というルールらしい。
『ん……』
霊幻さんは息を漏らしながら指を２本挿れた。
『ばらばらに動かせそう？』

『な、んとか……』
『音、録るからマイク寄せるよ』
グチュグチュ、くぷくぷという音が大きくなる。
『……っ』
音よりも、それによって恥ずかしそうに口元を押さえた霊幻さんにグッときてしまった。
『次、３本ね。慣らしながらディープキス見せてくれる？この試験管にご奉仕してね』
かぱ、と開けた口をカメラが捉えて。霊幻さんは半ば口を開けたまま、プラスチックの試験管に舌を絡ませた。
『ん……、っふ……、ちゅ……』
ヌラヌラと蠢く舌に喉が鳴る。
カメラのアングルが、自分視点でキスしてるみたいな位置になったので、思わず口が動く。
『……っ、は、』
『ほぐれたみたいだし、エネマグラいこっかー』
霊幻さんから試験管を回収し、湾曲した凸凹のある性具を渡す。
一度カメラでヌラヌラと光る、ちょっとフチがぽってりしたアナルを映してから、エネマグラの挿入を始めた。
『そっちが上ね。そーそー、キバると入るから、力入れて』
霊幻さんの処女アナルがエネマグラを飲み込んでいく。何とか全部挿れたら、バンドのようなモノで固定されていた。
『知ってる人は知ってるよね？前立腺を刺激する医療器具でーす。霊幻センセがよがり狂うまで、擬似フェラで楽しんでね〜』
霊幻さんに透明な男根を模したバイブを手渡す。
『はいご挨拶。先端にキスしてから、ペロペロ舐めてね〜』
ちゅ、と薄いピンクの唇が、鈴口にキスして、ドキっと胸が跳ねる。
道具にフェラしてるから、モザイクが無くて、全部丸見えだ。
霊幻さんが先っぽを咥えたり、舌でペロペロとソフトクリームを舐めるように舐め上げるのも、見放題だ。
『イラマチオいけそう？』
『……こうか？』

霊幻さんがじゅぽじゅぽと口にバイブを出し入れする。
『うーん……、男優さん入りまーす』
スーツの男優が２人フレームインしてきて、１人は霊幻さんの頭を押さえて、もう１人はバイブを奪う。
『はい頑張って〜』
ぐぽ、と。バイブが喉の奥まで入ったのが見える。
『おごっ！？』
涙目になった霊幻さんを無視して、男優は何度も喉を突く。
『ごほっ！？あがっ、おぇっ！！』
『はい、口に出しまーす』
射精機能付きだったらしいバイブは、びゅるると霊幻さんの舌の上で白いローションを吐き出した。
『ごほっ、ごほっ、……！？』
それをダラダラと口からこぼしていた霊幻さんが、ぴくりと腰を跳ねさせた。
『らんか、くる、くゅるぅ……っ！』
『はい、枕、抱かない。胸広げて、カメラ見てねー』
『あぁ……っ』
悩ましく目を戸惑わせて。霊幻さんは腰を何度も跳ねさせた。
『エネマグラで女の子イキしちゃったねー。霊幻センセ、今どんな感じ？』
『まだ……イって……ん、はぅ……、』
霊幻さんの身体がみるみるうちにピンクに色付いていく。
『これ……終わんなぃ……頼む、抜いてぇ……っ』
いやいや。もう少し見せてくださいよ、霊幻さん。
『んー、もう１回メスイキしてからにしよっか』
監督に拍手。
『そん、なぁ……あ、あ、あ、イく、いやぁ……っ』
ひくんひくんとエネマグラが触ってもいないのに内部の律動で上下に動く。霊幻さんは真っ赤な顔をして、熱に浮かされたみたいに涙目になっていた。
『じゃ、最後はさっきのバイブで中まで見せながら擬似セックスしよっか。流石にこれは男優さん入れるよ〜』

『んっ、んぁっ』
エネマグラを抜かれて霊幻さんが鼻にかかった嬌声を上げてる間に、スーツの男優が透明バイブ片手にスタンバイする。
男優はバイブにローションを塗りたくって、ズブズブと霊幻さんに挿入していった。
『あっ、あ、あ……』
霊幻さんのアナルの中が、透明バイブでモザイクごしに透けて見える。ピンク色がさっきより赤く熟れていて、そそる。
男優さんが特殊なバンドでバイブを腰に固定する。
『気持ちよかったら素直に言うんだよ、センセ』
『あ、あ……分かっ、た……っう！』
ずん、と男優が腰を打ち込む。
霊幻さんの足を肩に持ち上げた男優は、ゆっくりと抜き差しをして、内部を探っていた。
『ああああっ、っぅんっ、そこ、気持ちいい？かも……っあ！』
霊幻さんが反応した部位を、小刻みに腰を揺すって刺激する男優。
『やだっ、そこ、イく、イ……っ』
ぴゅる、と精液を腹にこぼす霊幻さん。
『あ、あう、イった、イったのに、なんで、』
『霊幻センセ、ネコは好き？』
『はへ？んぁっ、ズンズン、いやっ、ネコ、べつに、』
『じゃあ、イヌは？』
『好きぃ……っ♡』
ぞく、と腰に熱がこもる。
『イヌ好き？』
『好きっ♡すき♡』
精液をこぼしながら、熱い吐息で好き好き言う霊幻さん、破壊力がヤバい。
『〰〰〰っ、やだぁ……っ♡』
ビクン、と腰を跳ねさせてメスイキした霊幻さんがまた枕を抱きしめるが、今度は何も言われなかった。
『はーっ、はぁ……っ♡』
ぐに、と広がった熟れたアナルをカメラに見せてくれながら。

『俺でいっぱい、シコシコして……♡』
熱い吐息を残して、ビデオは終わった。

……男優とカラミ無くて、良かったー！！！！
いや本当に。最後まで道具のみで心底ホッとした。霊幻さんの唇もうしろも処女のままで、本当に良かった。もし男優が処女奪ってたら、無意識に呪ってしまっていたかもしれない。割と冗談抜きで。

ホッとしたら。

ムラムラと、さっきの霊幻さんの痴態を見たくなる。
突かれながら「好き」って言ってたところ良かったな……。
ゴソゴソと愚息を握りながら、プレステのボタンを操作する。
抜きどころの多いビデオだった。

それで済ませておけば良かったんだ、俺は。

でも、魔が差してしまった。

※※※※※

「保留、ですか」
「そうだ」
何度目か分からない相談所での告白、また同じ答え。
「俺とお前は同じ職場だ。こういうのは慎重にしないといけない。分かるな？」
「それは」
何度もはぐらかされて、俺は少しいらだっていた。
「あなたがＡＶに出てたことと、何か関係ありますか？」
――口が滑った、と思った。
ぎ、ぎ、ぎ、とぎこちなく霊幻さんがこっちを見る。
「な、にを言って」
「イヌは好きですか、霊幻さん」
ぼん、と一気に霊幻さんの顔が真っ赤になる。

「俺は気にしてないです。でも、」
俺はにっこりと笑って、すり、と霊幻さんの頬を触る。
「影山くんはどう思うのかなあ」
さあああ、と次は霊幻さんは真っ青になる。

ただ俺の次の一言を待っている霊幻さんを。

俺はじっと、見下ろしていた。

続